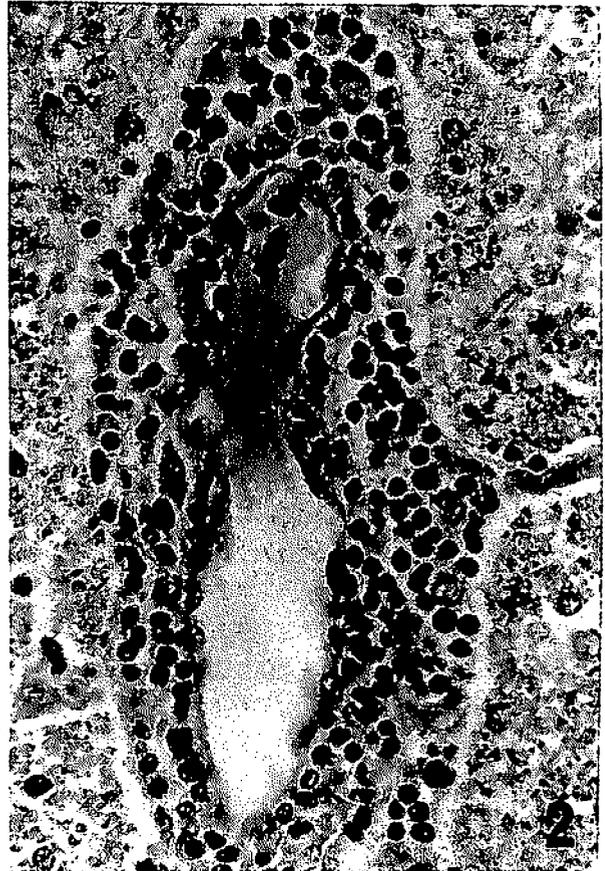
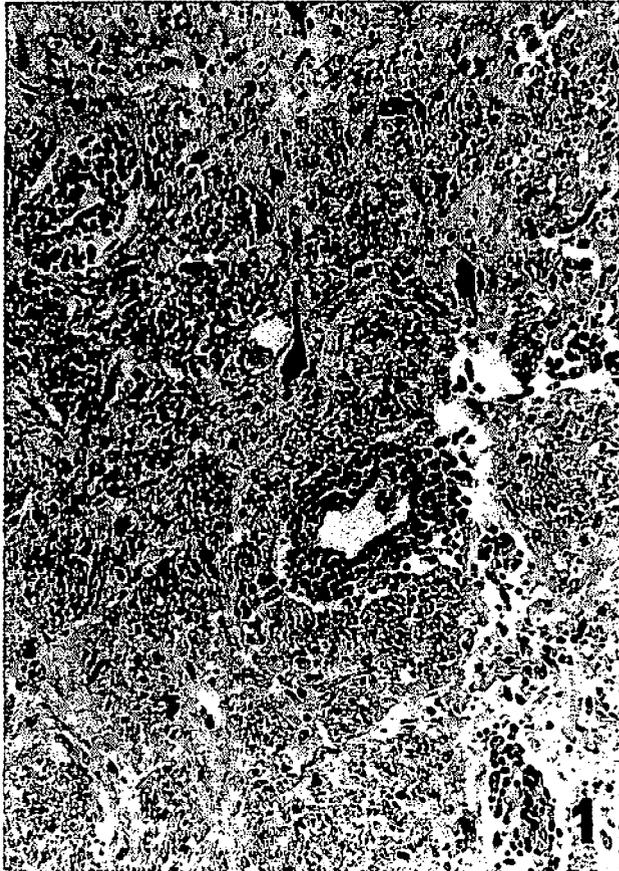


犬の播種性脱髓性脳脊髄・髄膜炎

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題

第21回獣医病理学研修会標本No.357



動物は犬、ポインター種、雌、4才である。この犬は1980年4月4日狂犬病精製不活化ワクチンを接種された。翌4月5日から斜頸を示し、4月7日朝からは側臥して全身性間代性痙攣を示して起立不能となり、4月8日斃死した。

病理解剖学的には、脳髄膜の充血、固定後では頸髄横断面に赤色軟化巣、胸髄横断面に点状出血を散見した。

脳、脊髄の組織学的変化は播種性脱髓性脳脊髄・髄膜炎に要約される。髄膜炎は大腦、脳幹、小脳、全レベルの脊髄に認められたが、その病変程度は概して軽度であった。髄膜炎は軟膜における囲管性に主座した細胞浸潤であった。浸潤細胞はリンパ球、形質細胞、単球、好中球、マクロファージから成り、これらの細胞要素は部位により種々の程度に混在していた。また、髄膜炎には出血、水腫がしばしば伴われ、血管内皮細胞は腫大していた。一方、脳脊髄炎は動・静脈周囲性の、脱髓を伴う細胞浸潤から成っていた（写真1、橋、HE染色、×150）。

浸潤細胞は髄膜におけると同様であったが（写真2、橋、HE染色、×500）、病巣によっては脂肪顆粒細胞、ヘモジリン貪食細胞も混在していた。囲管性細胞浸潤の程度はさまざまであった。髄鞘染色標本では、細胞浸潤領域は完全に脱髓し、髄鞘の崩壊産物が遊離性に、あるいはマクロファージに貪食されて認められた。

以上の囲管性病巣は次のように分布していた。大腦では場所を選ばず左右の皮質、髓質に散発し、間脳、橋、延髄では大腦よりやや多発し、小脳では髓質のみに散在していた。脊髄では全レベルにやや多発性であり、部位によっては灰白質にあるいは白質に多発していたが、概して前者に強く出現していた。また、囲管性病巣は時折り融合してやや大型となり、脂肪顆粒細胞を伴った軟化像もあった。神経細胞は消耗性色素沈着のほか、稀に膨化、壊死を示した。脊髄白質では、稀ではあったが、血管とは無関係に軸索の膨化、崩壊が見られ、原形質型星状膠細胞が目立ち、希突起膠細胞の核濃縮も認められた。

本例の病変は、中枢神経の自己免疫疾患である各種動物の実験的アレルギー性脳脊髄炎、犬の狂犬病ワクチン接種後脳脊髄炎、人のワクチン（麻疹、痘創、狂犬病など）接種後脳脊髄炎のそれに酷似する。本例の原因については不明である。本例の稟告からは狂犬病ワクチン接種と発病との間に因果関係がありそうであるが、両者間の直接的関係は次の理由により一応否定されよう。すなわち、本例は狂犬病ワクチン接種から発病までの期間はわずか1日であり、もしワクチン接種により発病するならば、少なくとも1週間の潜伏期間を要することが過去の資料で常識化されている。